

ホトトギス

昭和二十四年三月二十六日発行者特別技術雑誌第六二七号
平成三十年五月一日発行 第百二十一卷第五号

ホトトギス

五月号



風雅の小筥(五)

廣太郎

ホトトギス読者の中で、俳句を始められるきっかけとして、友人や知人に誘われて始められた、という方は結構多くいらっしゃるのではなうか。統計をとったわけではないが、よく聞く話として、俳句を勧められるの多くは、次のような誘い文句を使う。

「俳句は紙と鉛筆があれば出来る、一番安上がりな趣味である」という言葉である。確かに基本的には紙と鉛筆があり、俳句会に行けば、俳句の先生と称する人が手取り足取り俳句を教える事もあるだろう。しかし何時までも紙と鉛筆だけで俳句が上達出来る、という事はないのは当然お判り頂けるだろう。俳句会や俳句教室に行くのに電車賃がかかる、その為に車を買う人がいるかも知れない。まあここまでは冗談として、やはり紙と鉛筆から次の段階は、そう、俳句を詠む手引き。言わずと知れた歳時記が大切なのである。このホトトギスの読者は、もう基本的な事はお判りなので、現在のところ最新の「第三版」ホトトギス「新歳時記」についての話になるが、先月申し上げた俳句の「诗情」について、もう皆様お読みだとは思いますが、この歳時記の「序(初版)」の「季節の取捨」の箇所を今一度読み返して頂きたい。虚子編の「新歳時記」からこの方針は踏襲されてきており、①から⑤の項目全て「詩趣」に關係して取捨選択したという事が書かれており、①から⑤の項目も俳句を詩の趣として捉えている事は勿論現在もしっかり引き継がれているのである。

旬日記 汀子

平成二十九年五月一日 ロイヤル吟行会

朝帰りして行春の灯の下に
メイデーと知らずに過ぎし中之島
行春のパリの消息聞きたしと
五月二日 無名会

場所替へて五月の会となりにけり
東京の余花とてそれも終る頃
やり終へし五月の行事一つづつ
風心地よきとき薄暑なりしかな
恪勤な時間に忘れぬる薄暑
五月六日 芦屋ホトギス会

パリ土産すぐに着てみる薄暑かな
少しづつ稿債減りて夏に入る
五月七日 下萌旬会

若葉には余る日差のありにけり
根切虫居る筈と知る傷みやう
根切虫なきはかけてやるまいぞ
五月九日 大阪倶楽部

探しものばかり夏めく日々となる
包まれてゐると思へぬ夏霞
見慣れたる山遠ざけて夏霞
高 速 路 先へ先へと夏霞
五月九日 綿業倶楽部

気風よき祭帰りとすれ違ふ
旅の留守祭祝儀を包みおとく
夏めくと思へば予定次々と
五月十一日 清交社

柏餅にもひと工夫ふた工夫
下り立ちて庭の新樹に包まる
何の木となく覆はれし庭新樹
今日は晴明日は又雨庭新樹
五月十二日 工業倶楽部

山深く来しこと余花に逢へしこと
五月十三日 四国ホトギス同人会

夏霧を払ふすべなき高速路
琴平の路地又曲り椎の花
朝の雨上り薄暑の旅心
五月十四日 四国ホトギス同人会

山会の久保佐知さんと会へし夏
美しき旅路の夜明け母の日よ
五月十七日 夏潮旬会

日帰りの旅も五月の一日かな
心地よき初夏の予定は過ぎ易く
旅五月予定に追はれぬること
祝ぎの旅とて快晴の五月かな
五月十八日 クラブ合同

快晴や心に薔薇の香を纏ふ
毎年よ母の日旅にあることを
祝はれてやはり母の日なりしかな
風少しあり薔薇の香を運ぶほど
五月十九日 アネモネ旬会

夏霞 欠 席 多 小 句 会
祈りあり余花の旅路を明日にして
夏霞よりの花弁ことばなる
アネモネの花弁ことばなる
水遣つてならぬ仙人掌とはいへど
五月二十日 北海道ホトギス同人会

降り立ちて初夏の空気に包まる
邂逅の誰彼蝦夷の初夏の旅
東京と小樽を結ぶ新樹晴
こんなにも心地よき旅新緑に
包まれてゆく新緑の大地の香
五月二十日 北海道ホトギス俳句大会前日旬会

その香とはまだ会はぬ旅ライラック
涼しき灯こは小樽と思ひつつ
なつかしき会話行き交ふ涼しき灯
五月二十一日 北海道ホトギス俳句大会
片陰を拾ひては見学の道
太陽がもう昇りけり蝦夷五月
五月二十二日 句会と講演の会

鳴きつものるなき松蟬の遠ざかる

ハンカチの汚れぬ北海道の旅
蝦夷の旅終へしも初夏の東京に
長くなる滞在初夏の東京に
五月二十三日 虚子の同窓会

冷房の欲しき人数揃ひけり
その頃は若かりしとは言はぬ夏
ともかくも集へば学ぶ会は初夏
時間経つ早し二人を悼む会涼し
汗拭いてまだ来ぬ一人待つことも
一年の消息持ちて集ふ夏
五月二十四日 第二旬会

都合よき人悪き人夏稽古
年のこと忘れし人等集ふ夏
皆齢を忘れ涼しき灯の下に
来年を約す同窓会の夏
五月二十五日 きざらぎ会

明易やその後の経過案じつつ
旅幾つ終へて涼しき灯の下に
滞在の長き東京業平忌
ひと仕事終へて寛ぐ業平忌
咲き初めて匂ひの垣塙なりし薔薇
杞陽さん偲ぶ業平忌なりけり
五月二十六日 時雨旬会

一本の薔薇百本に勝るとも
足取りも祭帰りと思はるる
その話新茶を淹れてからのこと
写生文書かねば新茶先づ淹れて
祈ることも多し五月も過ぎゆくは
五月三十日 有恒俳句会

二週間留守にせし家の涼しき灯
木洩ぐりに日焼の油断ありけり
庭めぐりに来て会场の涼しき灯
咲き終るもの万緑の庭となる
万緑を抜け来し風に包まるる
古茶淹れて会話途切ることのなく
短夜とかかはりもなく熟寝かな

廣太郎句帳

廣太郎

平成二十九年五月一日 カトリック新聞選者吟

嘯も 聖歌に和せり 四句節

五月六日 芦屋ホトギス会

住み古りて江戸に馴染めず初鯉

五月七日 野分会芦屋例会

君現れてより牡丹は脇役に

五月七日 野分会芦屋例会

卯浪寄す大阪湾を折り畳み

五月七日 青風会芦屋例会

門潜るやうに卯浪の寄せ来たる

五月八日 朝日カルチャー若草句会

紫は人欺かず 桐の花

五月八日 朝日カルチャー若草句会

殺象は象に育つと言ひし君

五月八日 朝日カルチャー若草句会

菖蒲葺く軒に旧家の竹まひ

五月八日 朝日カルチャー若草句会

新茶淹れいよ還暦近付けて

五月十一日 土筆会

初節句鳥語囁してをりにけり

五月十一日 土筆会

昨日宇治今日静岡の走り茶来

五月十一日 土筆会

新茶汲む板に付きたる路地住ひ

五月十一日 土筆会

新茶汲む高層ビルを仰ぎつ

五月十一日 土筆会

その中に高僧も掃く檉落葉

五月十一日 土筆会

武器飾るより子等に狙はれし太刀

五月十一日 土筆会

子の未来国の未来へ武器飾る

五月十一日 土筆会

園丁に操られたる若葉風

五月十一日 土筆会

一輪は天使の涙ポピー咲く

五月十三、十四日 四国ホトギス同人会 大会

橋桁となる島いくつ瀬戸卯浪

十年てふ句碑の歳月花は葉に

扇風機以外は手動金丸座

天守閣小さく涼しく天を突き

さくらやの梯残し麦の秋

公園の起伏緑の起伏かな

その中に入れば江戸の世木下關

五月十五日 北國文芸選者吟

鳥語止み松蟬の音と入れ替る

五月十七日 蕉心会

皇室に慶事のニュース若葉風

葉桜と下町の空触れ合ひて

芭蕉めく人蕉像と涼しく居

還暦の夏蕉翁を十歳超え

讃岐では鯔鮓江戸では蕎麦の初夏

やうやくに金魚平和を取り戻す

軽暖の蕉像背ナの丸さかな

蕉庵の風を色付けえごの花

五月十八日 登高会

地球釣る如く山女を釣りにけり

疑似餌てふ人の浅知恵山女釣る

初夏の旅故郷と決めてより

流れてふ刹那に山女水を脱ぐ

五月二十一日 北海道ホトギス同人会 大会

還暦を迎へし朝や蝦夷涼し

若葉風年尾の縁繋ぐ旅

手稲山雪溪に空降りて来る

涼しさを傾けてゐる主翼かな

夏霞小樽優しく描きゆく

キヤンパスに展望台に余花浄土

五月二十二日 ホトギス社句会

松籟と松蟬二重フーガかな

江戸の靄抜けければ蝦夷の夏霞

夏霞脱いで威を張る讃岐富士

蝦夷で会ひ江戸で会ひ葉流さん涼し

五月二十三日 若水句会

薄紙を剥ぐやうに罌粟咲きにけり

罌粟の花ひよろひよろと風躲しけり

足に意思ある如百足虫畳這ふ

笹粽解き 笹舟作る 吾子

粽解くより母の香でありにけり

百足虫這ふ壁戦いてをりにけり

靴履かぬ自由不自由百足虫這ふ

五月二十四日 目黒学園句会

明易の北の大地へ一番機

穴子焼く香にボルドーのコルクの香

明易の旅路は讃岐から蝦夷へ

短夜の二人は今からが佳境

五月二十七日 青風会東京例会

明易の日に染まりゆく電波塔

十葉の香に名園の目覚めゆく

夏蝶を迎へるための一花かな

五月二十七日 野分会東京例会

飛翔体落ち 卯浪立つ 日本海

虹鱒の色放ちつつ焼き上がる

虹鱒の跳ねて水惑星騒ぐ

卯浪立つ 辺り地球の涯といふ

五月二十八日 「河内野」五十周年記念祝賀会

五十年は永久への一步灯涼し

雑詠

廣太郎 選

極月の廃業告げて切る電話 香川 三宅久美子

この家に一人となりし隙間風 同

枯れきつて風も素通りする芒 同

枯菊のなほも咲かんとする力 芦屋 黒川悦子

落葉積む日々あり俳句詠む日々も 同

初富士や富士もう見えぬ富士見町 神戸 藤井啓子

初富士といふものぞみの二十秒 同

新婚の小さき聖樹の灯りけり 同

小正月骨正月とものがたき 同

寒餅を干して小まめでありし母 同

商をしてゐし頃の初戎 同

泳ぐともなく寒鯉の現れし 同

寒鯉の水の色へと消えにけり 同

冬芽まだ色も形も枝のうち 同

底冷の動かぬ路地に動かさず居 香川 湯川 雅

振り返る径の退りて冬ざる 同

著ぶくれて蹴り損ねたる小石かな 同

引力を物ともせず霜柱 東京 橋本くに彦

寒天の色裂く音や戦鬨機 同

一枚の闇の深さや寒の星 同

冬帝の腕に列島すつぽりと 神戸 涌羅由美

蒼天をさらにまさるに寒紅梅 同

現世に大見得を切る初芝居 同

志士馳せし坂とや落葉駈け上る 同

熱爛や聞きしに勝るいごつそう 同

霜月や土佐は女も酒豪にて 同

すぎるもの見つからぬまま枯れし蔓 同

椅子の背に母の遺せしちやんちやんこ 同

うつかりと師走の街に乗り入れる 同

雪のせて近づきがたき富士となる 袋井 湖東紀子

真白なる富士冬帝となりゆける 同

冬薔薇を愛し孤独を愛しけり 同

海光に松黒々と避寒宿 龍ヶ崎 今橋眞理子

路地小春どう歩いても海に出て 同

海鼠突く舟を浮かべて磯日和 同

きつぽりと神の青空初氷 奈良 古賀しぐれ

悉く神の宿りて石互つる 同

信心の身の透きとほりゆく寒さ 同

永別の夜の黄落のきりもなし 熊本 岩岡中正

改元の話大根真つ一二つ 同

虚子のこと考へてゐる漱石忌 同

雑詠句評（四月号より）

雅　・佳　乃・紀子
公　次・霜　衣・しげ人
さい雪・純　也・くに彦
仁　義・廣太郎

桐一葉落ちたることに富士見えし　熱田　嶋田　一步

大きな桐の木の向こうに富士が見える辺りにお住まいなのであろう。生憎、桐の葉がくれの富士であったが、たった一枚の桐の葉が落ちた後の空間に富士が現れた。距離は勿論、桐の葉の大きさもあつての驚きと発見の嬉しさが、音を伴って伝わる。

物寂しい秋ではあるが、素晴らしい一景に満足している作者の思いがある。（雅）

桐の葉がはらりと落ちる事によって秋の訪れを感じる、という風情ある季題を、富士山の雄大さを背景に見事に詠んでいる。桐の葉は一葉で結構大きく、夏の間は富士山を隠すほど茂っていたのであろう。そしてそれが落ちると視界が開け、富士が見えたのである。何とも贅沢な景である。（廣太郎）

妻は煮て夫は焼いて雑煮かな　米　直　橋本くに彦

雑煮の中に入れる餅を妻は煮て、夫は焼くという。同じ汁の中に入れるのだけれども、それぞれこだわりがあるのだろう。小さい頃から慣れ親しんだ雑煮の好みならば特に誤れない。雑煮という季節がそんなところでしたっけと効いてきている。こだわりをそれぞれ通すところが夫婦円満の秘訣なのかもしれない。

（佳乃）

雑煮に入れる餅は、全国津々浦々色々な種類があると聞く。基本的には西は丸餅で東は角餅。そしてその餅を雑煮に入れる際に焼くか煮るかで地方色がある。作者の家庭かどうかは判らないのだが、夫婦でその習慣が違う家である。現在でもその風習を守っているのが嬉しい。（廣太郎）

眼を着る犬を見てゐる猫小春　# 千原 穀子

眼を着ている犬はよく見かけますが、眼を着ている猫はあまり見ない。人間に眼を着せられている犬を、小春の目の中でぬくぬくとしながら見ている猫。犬と比べて何と自由なことかと思われたのだろう。犬と猫と人間の関係性が、季節を通してユーモラスに語られている。（紀子）

最近では愛猫にも眼を着せている飼い主をテレビで見た記憶があるが、一般的には犬に眼を着せている飼い主の方が圧倒的に多

天地有情

文月や文字に囲まれたる生活 東京 稲畑廣太郎
みちのくへ鐵路一本稲の花 同
美しき雪吊なれど雪降らざ 長岡 安原 葉
夜の枯木浴びる東京タワーの灯 同
俳論を嫌ひし父や底紅忌 神戸 後藤比奈夫
句会后の談論禁止底紅忌 同
父に似し母に似しとて初鏡 同 三村純也
廻礼に微釀の息を洩らしけり 熊本 岩岡中正
マスクしてより旅人となりにけり 同
無駄な句は一句もなかり年送る 同
短日の金の朝月仰ぎ発つ 神戸 千原叡子
きらきらとしぐれの渡る峡の空 同
越前和紙漉きて祈の鶴を折る 同 和田華凜
聖夜劇子等は天使の羽根つけて 同
短日といふ空白の中にをり 同 浜崎素粒子
ささやかな幸せでよし冬の虹 同
雨戸開くれば忽ちに秋の声 吹田 大橋 脩
柘榴の実爆せてこの世に喝入る 同

ぼうたんや恋ひたすらな頃ありし 福山 竹下陶子
村の過疎とどめもならぬ春深し 同
喪に服す師走の外の匆忙に 金沢 藤浦昭代
喪籠に四温の如く文届く 同
変わりゆく世に逆らはず去年今年 東京 今井千鶴子
不自由な我が脚たたく冬至風呂 同
雪晴の白樺に日の余りたる 群馬 中杉隆世
幽かなる落葉の声の聴きとれず 同
また一人路地より出でて日和ぼこ 龍ヶ崎 今橋眞理子
日和ぼこ海に人生問ふことも 同
手術せし大き傷痕冬至風呂 東京 山田閨子
海原を染めて沈みぬ冬至の日 同
枯芒揃ひ拵がり美しく 熱海 嶋田一步
枯尾花仙石原を美しく 同
屠蘇受くる正座に戻す膝頭 香川 湯川 雅
追ひ越して回り込んだる御慶かな 同
太陽のこれより戻り来る冬至 東京 岩村恵子
水音も庭の寒さの一部分 同

日子選